

文学とジャーナリズム —小説の観点から—

平野 幸治

序

「文学」は、広義では「文字によって書かれたもの」を意味する総称である。現代では文学は、文芸作品、またはその文芸作品を対象とした学問を表す狭義の意味で普通は使われる。広義の意味で文学が使われる機会は、現代の日本では狭義の意味の文学に比較して稀である。Richard Steele や Joseph Addison が編集発行した 18 世紀の雑誌 *Tatler* を読む機会があった。文中で使われる “interesting” が文脈から考えると現代の “interesting” の語義の意味している様態とどことなく違うのではないかと違和感を抱いた。OED によれば、単語 “interesting” の 18 世紀に消えてしまった意味に “of importance, important” があるそうだ。この意味の変容が物語るのは、読者あるいは読者層を形成する集団の一致する評価を表す「重要さ」が、個人の評価や興味を示す「面白さ」へと移行したことをこの語の意味の変化は表していると考えられる。この “interesting” の意味の変化については阿部公彦氏の『モダンの近似値』に詳しい。19 世紀前半イギリス南部の田園を旅する William Cobbett の *Rural Rides* を読むと、田園が「困い込み」によって荒廃していく様や過疎化する村の実情を描写する文章は小説の叙述と錯覚してしまうほどであるが、Cobbett は要所所で比喻を用いて読者の関心を引くが、比喻が強烈で逆に文脈との違和感が生じ、読者は現実に引き戻される。20 世紀前半 George Orwell はコラムニストとしてジャーナリズムの世界にいたが、寓話を用いて「本当らしさ」を表そうとした。文学とジャーナリズムの相似と相違を小説の観点から解き明かし、それぞれのジャンルの持つ特性と限界を歴史的に捉えていくことを目的にしている。その目的を達成するために対象となる作家は、19 世紀から William Cobbett や Charles Dickens、19 世紀後半から 20 世紀初頭から Gilbert Keith Chesterton、20 世紀前半から George Orwell を具体的に取り上げる。ジャーナリストとしての側面から Samuel Johnson にも触れる。本稿では William Cobbett に特に触れる。

1. 文学とジャーナリズムの間で—小説の特徴と機能

現代では「物語」と言えば、小説というのが普通になっている。人間と人間、人間と社会を結びつけるのは、言葉や行為であり、特に限られた枠組みを超えて広がりを持った社会的

な活動をする時には、人は互いに物語を語り合って理解してきた。民族の壮大な歴史を伝える物語、一般に「神話」と呼ばれるものから、個人の身の回りで起こった出来事を伝える日常の行為まで、「人間のすべての語りの行為は、あるまとまりを持った物語を志向していた。人間は自分の住む世界を理解可能なものにするために、それについて物語を語る」と川口喬一氏が『イギリス小説入門』の中で述べている。この意味で、「物語」と「歴史」とがヨーロッパの言語において本来同じ語であることは暗示的である。物語は、「一貫性を持った物語を語る」という原理によって構成されている。

それでは、物語がどのような形を取ったときにそれを「小説」と呼ぶことができるのか。英語で novel と言うとき、Jeremy Hawthorn によれば、普通それは次のように定義される。まず、「かなりの長さを持ち、散文で書かれた架空の物語」であって、「連続性を持った出来事の中で、人間的経験が写實的に描かれること」と捉える。外形的に「かなりの長さを持つ」という定義によって、先ず、short story は novel に入らないことが分かる。「散文である」ということによって、例えば、韻文で書かれた叙事詩は排除され、「架空の物語」ということでノンフィクションは小説ではないことが分かる。ここまでの定義は外形的で伝統的で一般に誰もが納得がいく程度に確立されていると考えられる。しかし小説の定義の最後の条件、「人間的経験が写實的に描かれること」というのが外形的であったり伝統的であったりという枠を超えて論議されると問題になる。実際には、「人間的経験」にしても、「写實的」にしても、かならずしも厳密に規定できるものではない。先に挙げた川口喬一氏は、「例えば、16世紀の終わり頃のエリザベス朝小説と呼ばれるものや、17世紀末頃のバニヤンの『天路歷程』はある一貫した物語を散文で語り、素朴な形ではあっても、今日的な小説の定義に合致するような写實的人物造形や現実的な人間観察等が見られない訳ではない。同時にまた、18世紀以降のいわゆる小説の中にも、以上の条件を満たさないような、変わった小説がないわけではない。」と述べている。小説を「小説」と定義する場合にも例外が存在するということである。「人間的経験が写實的に描かれること」は小説の核を構成している。

次に小説の特徴の一つに、キャラクター、特に物語を語るキャラクターが重要な役割を果たしている。先の定義にもあるように「人間的経験が写實的に描かれ」実際に実存していると容易に考えられるキャラクターは、小説を特徴付ける要素と言える。この意味でビクトリア朝の小説の興隆は、「写實的人物造形や現実的な人間観察等」によって秀でたキャラクターが生み出された成果と言える。ここで注意を喚起しておきたいのは Kettle や Watt の小説論で提示されている分析的な考え方に対する意見である。Watt の『小説の勃興』で言われているように、「芸術作品を分解したり、そこから固有の特質を抽象したりすることは危険である。作品を分類整理し解剖すると、作品の総体を把握し得ない危険が生じる。なぜなら密接に関連しあっているのが常だからである。キャラクターを筋から、物語を背景から切り離すことは危険である」という考え方は、ジャンル論や分類化にしばしば陥りがちでよく見受けられる形式論を免れて小説論を読者論と置き換えて捉える術を提示する。

また小説の機能は、虚構でありながら「人間的経験が写實的に」述べられていることで説得力を獲得し読者の想像力に訴えて「本当らしさ」を提示する。小説は、このような作用を持っているため、その機能として社会批判という枠組みも考えられるが、この点については、次章でジャーナリズムとの視点を論じた後で言及する。

II. ジャーナリズムと文学の間で—読者の機能

小説は読者の想像力に訴えるのに「人間的経験が写實的に」述べる。そのように描かれることで本当らしさを帯びて小説は説得力を獲得するのに対し、ジャーナリズムは読者の良識に訴える。ジャーナリズムは真偽を述べる。ジャーナリズムは、真偽つまり白黒を明白にすることによって読者を獲得する。いや、ジャーナリズムは、読者を選ぶことによって真偽を獲得する。William Cobbettは*Rural Rides*の中でエイヴォン谷を見下ろしながら‘country gentlemen’について次のように述べている。

However, to drop Jerry, for the present, the baseness, the foul, the stinking, the carrion baseness, of the fellows that call themselves ‘country gentlemen,’ is, that the wretches, while railing against the poor and the poor-rates; while affecting to believe, that the poor are wicked and lazy; while complaining that the poor, the working people, are too numerous, and that the country villagers are too populous: the carrion baseness of these wretches, is, that, while they are thus *bold* with regard to the working and poor people, they never even whisper a word against pensioners, placemen, soldiers parsons, fund-holders, tax-gatherers, or tax-eaters!

Cobbettの怒りは、額に汗して働かず優雅な暮らしをしている「自らを‘田舎紳士’と名乗っている輩」に向けられる。このようなCobbettの主張を「急進的でラディカルな社会主義者」とか「ブルジョワと非ブルジョワの対立の構図」と捉えるのは必ずしも的確ではない。Cobbettは、イギリスに革命を起こそうと言っているのではない。小池滋氏が『もうひとつのイギリス史』の中で述べている。「本来、彼は田舎に根を張るイギリスのバックボーン、典型的な保守主義者、愛国主義者のはずなのである。ところが、彼の根の張るべき田舎が崩壊してしまった。彼も根を切られたしまった一人」というWilliam Cobbettが*Rural Rides*の先の引用で怒りを向けている「田舎紳士」は、「イギリス人のバックボーンとして尊敬と誇りを込めた称号である。紳士とは本来田舎に属すべきもので、都市のものではない。田舎に本宅を持たぬ者は、紳士と呼ばれる資格はないのである」とも小池滋氏は述べている。彼らが帰属すべき田舎の農地が投資の対象になり、大規模産業の餌食となっていく現状を「以前多かった住民が、なぜ現在激減したか」と告発している。「農業革命の結果である。かつ

て屋敷を構えていた自作農が、次々に家と土地を棄てて、どこかへ去ってしまった」このような傾向や開発に拍車をかける新興のブルジョワばかりでなく英国国教会の牧師や年金受給者にも Cobbett の怒りが向けられていることは引用から理解できる。

当時の政治の体制にとって英国国教会は大きな役割を担い、それゆえ強大な発言力を持っていた。しかしその内部は常に「腐敗」が巢食っていた。内部で改革しようとする動きは19世紀前半の「オックスフォード運動」の例のように多数あったが、必ずしも成功しなかった。また対ナポレオン戦争によって軍事費等が爆発的に膨れ上がり、税金が重くなることは容易に想像できる。更に戦後復員して来た多数の軍人に年金を支給しなければならなくなり、「その金額が政府予算の上に重くのしかかり、これをカールスレイ子爵(1769 - 1822)が『死重』と名づけた」と『もうひとつのイギリス史』の中で述べられている。

They say not a word against the prolific *dead-weight*, to whom they GIVE A PREMIUM FOR BREEDING, while they want to check the population of labourers!

William Cobbett は、国の制度を根底からひっくり返せと叫んでいるのではない。例えば *dead-weight* が「結婚すればその妻に、その妻に子供が出来ればその子も、年金が受け取る権利があるのだから税金は増える一方」と言うように「人間として許せない矛盾を改めよ」と言っているのだ。先に書いたようにイギリスに革命を起こし国家を転覆させようとは言っていない。

William Cobbett が *Rural Rides* を出版した後、選挙法改正法が成立し、William Cobbett は、新しい選挙法のもとに行われた初めての選挙に出馬して代議士になった。彼が出馬した選挙区は、「南イングランドの野の選挙区から、」出馬したのではなく、皮肉にも「北イングランドのマンチェスターの北東10キロあたりの所に、産業革命によって急に生まれて来た、人口過密で汚らしい工業都市」であった。この事実は、彼にとっては痛切な皮肉であるとともに、彼が政治的にも根を張る田舎がなくなってしまったことを象徴している。この *Rural Rides* を読むと客観的数字やパンプレットの類いが度々書き込まれていて、事の真偽を述べる上で読者に納得がいく。もう少し別の角度から見ると、事の真偽を示す客観的数字や事実を記したパンプレットの類いは、実は参考程度の機能と見なす事も出来る。実際このような客観的証拠がなくとも、すでに読者は William Cobbett の筆致に引き込まれている。このような読書の場合、読書の目的や意図によって予め作品理解の許容度や理解範囲の深度が読者の中に既に構成されていると言える。

ジャーナリズムから身を転じ小説を通して社会批判をした作家に George Orwell がいる。Orwell は、Burma での異文化体験や *Down and Out in Paris and London* で表されている過酷な労働者としての経験をルポルターージュしている。George Orwell の面目躍如となっているのは小説 *Animal Farm* であるが、その作品は現実のロシア革命を下敷きにした寓話

である。

Orwell は、*Animal Farm* を出版する前の 1940 年 Dickens について書いている。Dickens の作品は多くの市民をその読者として獲得し現在でも広く読まれている。Dickens は、*David Copperfield* や *Oliver Twist* を読んでも分かるよう社会批判をテーマとした作品を多く出版した。Orwell と同じように Dickens は、ジャーナリズムから身を転じ小説を通して社会批判をした作家である。この転換点に読者の存在があった。

結びにかえて

小説が読者の想像力に訴える際に「人間的経験が写實的に」述べられて「本当らしさ」を獲得することは重要である。物語が本当らしさを帯びる事によって小説は読者の説得力を獲得する。ジャーナリズムは読者の良識に客観的事実で訴える。ジャーナリズムから身を転じ、小説を通して社会批判をした作家もいれば、ジャーナリズムの世界に論客としてとどまった作家たちもいる。

Works Cited:

阿部公彦『モダンの近似値』松柏社。

川口喬一『イギリス小説入門』研究社。

小池滋『もうひとつのイギリス史』中央公論社。

Allen, Walter. *The English Novel*. London: Penguin Books, 1954.

Cobbett, William. *Rural Rides*. London: Penguin Books, 1967.

Hawthorn, Jeremy. *Studying the Novel*. London: Edward Arnold, 1992.

Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel*. London: Hutchinson University Library, 1967.

Watt, Ian. *The Rise of the Novel*. London: Penguin Books, 1957.

